

被災地の現状と1年の歩み 参拝者に語る中村正美さん

24世帯58人が暮らしていた呉市安浦町市原地区は、「平成30年7月豪雨」で砂防ダムが決壊し、土石流や流木、岩が山津波のように押し寄せ、家屋と棚田が一瞬にして飲み込まれた。同地区の自治会長・中村正美さんがその体験と現状を広島別院で語った。



「1年前、地区の半分の家屋が濁流に飲み込まれた。家が押しつぶされ、流れていくのをただ見ていただけだった。無力さを感じた」。別院の本堂に、中村さんの声が静かに響いた。

地区のほとんどが農業を営み、棚田13ヘクタールで米作りをしてきた。その棚田の景色が一瞬にして茶色に変わった。「あの様子からは、数年は米作りができないと思いい、落ち込んだ」と話す。

「そんな時、最初にボランティアに来てくれたのが本願寺の僧侶や門信徒の皆さんだった。住職さんが汚れることも気にせず、泥まみれになって作業する姿が有り難くうれしかった」

ご門主のお見舞い（昨年10月）にも感激した。「97歳の母の手を取り、『元気でいってくださいね』と声をかけてくださった。母の励みとなった」。

現在、同地区に暮らすのは11世帯22人。地区の存続に関わる課題が山積している中、今春、田に流れ込んだ土砂をかき出し、7世帯で2・5ヘクタールに田植えをした。「みんなで力を合わせて

「課題多く押しつぶされそうに」



山間に広がる棚田一面に土石流が流れ込んだ。中村さんは、土砂をかき出して田植えを行った場所（写真左部分）を案内してくれた。用水路からの土混じりの水で、手前は土で埋まっている

同じ方向に進んでいきたい。そんな思いで可能な限り努力をしているが、できることもあれば、できていないこともある」と現状を話した。

◇ 7月14日、市原地区を訪ねた。中村さんが田植えをした棚田に案内してくれた。「水路を改修したが、土混じりの水が流れて、用水路近くの苗は育っていない。こういう状況はしばらく続くだろう」と話した。

再来年7月までに、田の現状回復か代替地を選

ぶかを決めなければならぬという。「災害が発生した日から3年以内というのが決まりだそう。残された時間は2年。小さな集落ゆえ、こういう時は難しい。ご先祖からの土地を守りたいのは全員同じ気持ち。でも、それぞれ思うところが違い、なかなか前へ進まない」と静かに語る。

「1年はあっという間。自治会長として自分が先頭に立って少しでも早く復興させねばという思いでここまで来たが、課題も多く、気持ちが押しつぶされそうになることも」と語る。

しかし、厳しい現実の中にも時折、うれしいことに出会う。その一つが、昨年12月に市原の仲間4人が広島別院の報恩講に参拝して帰敬式を受けたこと。「受けたことを知った時、とてもうれしかった。本願寺からボランティアに来てくださったのが縁と聞いた。今年12月には、みんなを誘って別院の報恩講に参拝したい」と語った。